

高原の風だより

2025（令和7）年6月 発行 <第30号>

総務経済常任委員会が先進地視察

森林資源の循環利用の促進など学ぶ

議会には2つの常任委員会（総務経済、社会文教）があり、地域課題について学ぶため年に1回先進地視察を実施している。過日発行の議会だよりでも少し紹介した通り、町では昨年からは木の産業づくりに力を入れており森林資源の循環利用の促進などが課題になっていることから、総務経済常任委員会では1月27日から2日間、三重県多気郡多気町にある（株）日新三重工場などを視察した。日新では今や住宅資材として欠かせない合板の開発・製造を手掛けていて国内市場シェアの約30%を占める。町でも民間企業が旧上田小学校校舎を内装材合板工場として活用する計画が進められている。



機械化により高品質な合板が効率的に製造されている三重工場（提供：日新）

高品質な合板を効率的に製造 ～株式会社 日新三重工場～

よく耳にする「合板（ごうはん）」とは、原木を大根の桂剥きのように薄く剥いたものを乾燥させ、単板の繊維（木目）方向を1枚ごとに直交させて、接着剤を塗布して重ね合わせたもの。合板は軽く、断熱性や吸音性、温かみがあり加工しやすいなどといった木材の優れた特性を備えているほか、重さのわりにその強さが大きい、広い面積が得られる、伸び縮みが少ない、切断・釘打ちが容易である、といったような特長がある。日新ではスギやヒノキ、米マツ、米ツガなどを国内外（国産材70%、輸入材30%）から調達し、原木切削機など機械化によって高品質な合板をより効率的に製造している。

また、工場から出る端材などについてはバイオマス発電やボイラーの燃料に使用するなど、持続可能な社会の実現の観点から工場内で循環利用の促進を図っている。



桂剥きの動画



原木を切削機で桂剥きにして薄い単板にする（提供：日新）



乾燥した単板を接着剤で貼りつける（提供：日新）

木の産業拠点づくり着々と

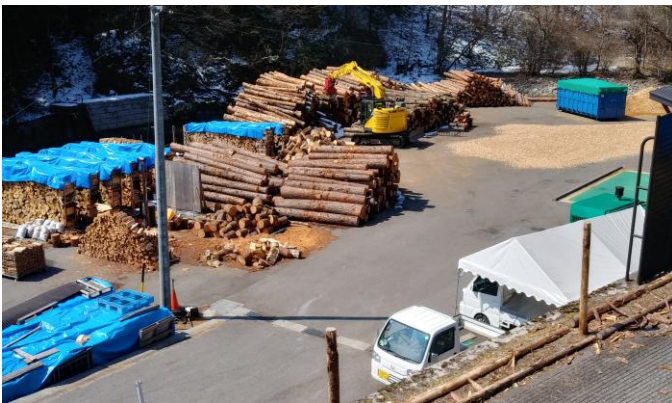
持続可能な地域林業の再生を目指す

木曽町の森林面積は9割を超え、その内の約7割を民有林（町有林を含む）が占めている。その民有林の多くが戦後植林されたカラマツで、樹齢60年を超えて伐期を迎えたものが多い。今後は間伐主体の森林整備から主伐・再造林の促進と需要拡大を進め、持続可能な地域林業の再生を目指している。今、着々と木の産業づくりを進められている。



間伐による森林整備が行われ搬出された木材

木質バイオマス燃料供給拠点施設 ～未利用材の有効活用～



新開にある木質バイオマス燃料供給拠点施設

の施設整備が高額になるため、ある程度規模が大きくないと導入が難しいという側面もある。

2018（平成30）年に事業開始したのが新開にある木質バイオマス燃料供給拠点施設。森林整備などによって生じる未利用材を有効活用して木質バイオマスを推進しようというもの。持続可能な循環型地域内経済の発展や雇用創出なども目指している。

「木曽町木質バイオマス事業協同組合」が施設運営を担い、同施設で作られる木質チップは町内の温水プールや役場本庁、文化交流センターなどをはじめ広域連合で設置した上松町にある木曽寮などで利用されている。木質チップボイラ

木工振興拠点「コウサクバ」～特注家具中心に小物まで製造～

木曽木工振興拠点施設「コウサクバ」は2022（令和4）年に旧黒川保育園跡地（おもちゃ美術館南）にオープンした。事務所兼工場は木造一部2階建て延べ面積が約380㎡。（株）木曽谷 Kousaku が指定管理者として「木工振興と木育の普及」をテーマに運営している。

木曽産のヒノキや特注の合板などを使用しながらオフィスやさまざまな施設向けの特注家具を中心に小物まで製造している。家具設計のシステムとも連動した最新機械（CNC マシン）なども導入し8人ほどが働いている。



曲面加工も可能な5軸 CNC マシン（同社 HP より）

地元材使った木曽町開田支所 ～切り妻の大屋根で景観にも配慮～

昨年3月から工事が行われていた木曽町開田支所が完成し5月7日、開所式が行われた。建物は木造平屋建て460㎡、伝統的建築様式の切り妻の大屋根を採用し景観にも配慮した。また、開田高原の町有林から伐採したヒノキやカラマツなど地元材を柱や壁などにふんだんに使用し温かみを感じさせている。

そのほかバリアフリー化を進めるとともに屋根付き駐車場を設置し、身障者や高齢者等の利便性を高めた。さらに72時間稼働する非常用発電機を設置するなど、防災拠点施設としての備えも充実させた。

事業費は工事費3億1590万円のほか設計管理委託料や旧支所解体、備品購入、用地購入などを含めると総額で約4億5200万円。新庁舎が拠点施設として有効活用され地域の活性化に寄与することを願っている。



地元材をふんだんに使用した切り妻大屋根の木曽町開田支所

旧上田小を内装材合板製造の拠点に ～町内企業に無償譲渡～



内装材合板を製造するため町内企業に無償譲渡された旧上田小学校校舎

旧上田小建物	用途
体育館・管理棟	内装材工場
校舎棟	資材倉庫
給食棟	事務室・休憩室

校舎になっている塩尻市の旧檜川中学校校舎で原木を桂剥きにして薄い板にする工程を行い、その後、旧上田小の工場で薄い板を繊維（木目）方向に1枚ごと直交させて接着剤を塗布し、重ね合わせてプレスで圧縮し所定の寸法に裁断する工程を担う予定だ。

地元産材の高付加価値化や雇用の創出、空き校舎の有効利用など

地域の活性化に向けて、町で進めている木の産業づくりをけん引する施設になって欲しいと思っている。

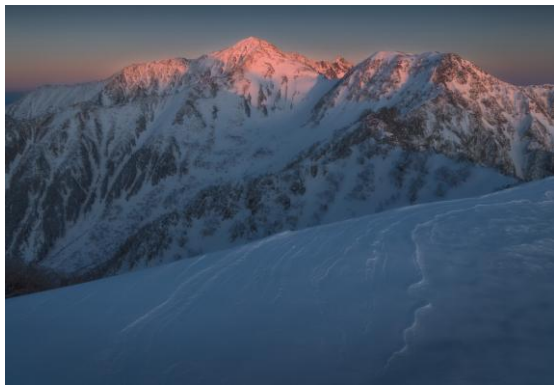
勝野木材と木の産業づくり協定締結 ～開田高原に事務所開設も～

町は昨年10月、勝野木材グループ（南木曽町）と木の産業づくりに関する協定を結んだ。育林・造林にも力を入れている同グループと連携しながら森林資源の循環利用の促進と地域林業の再生を目指そうというもの。同グループは木曽ヒノキの伐採から製材、木工品加工まで一貫して行う県内屈指の製材と素材生産事業を手掛ける会社。製造ラインはコンピューター制御され、時間短縮などの効率化や人件費のコストダウン、品質管理の維持徹底を図っている。グループでは今後、開田高原に事務所を構えるなどして今年から町内の民有林で伐期を迎えた樹木の伐採、搬出、再造林を本格的に進める予定。町では事業者を増やして木の産業づくりを加速化し、木材の安定供給と利用拡大にさらに力を注いでいく考えだ。



材木の搬出作業（提供：勝野木材）

写真を撮るため愛知から移住 ～冬の写真を好む～



麦草岳から眺めた中央アルプスの山々

また、最近「(河川工事などで)川沿いの樹木の伐採が行われ、かつてのような素晴らしい霧氷が見られなくなった」と残念がる。

そんな大竹さん、3年ほど前から御嶽山をメインに写真を撮るようになった。ただ、「普通の御嶽山では満足できない」と他の人が撮っていない御嶽山を求めて中央アルプスやハケ岳などに登り、そこから見た御嶽山の撮影に力を入れ始めている。

昨年は福島で行われた「雪灯りの散歩道」に合わせ、初めて個展を開催。300人くらいの来場者がありとても好評だった。右の花火の写真は、数年前にコロナ禍のためにさまざまな公民館行事などが中止になった際、把之沢分館で打ち上げた花火を偶然撮影したもので、とても珍しい貴重な1枚だ。今後は「カメラの初心者で、うまく撮るようになりたいという人がいれば教えることもしたい」とこれからを見据えている。大竹さんの木曽の写真だけを投稿するインスタグラムは次の通り。 @kisolandscape



柳又から眺めた花火

私の本棚 『死ぬまでジャズ』(鈴木良雄 著・株式会社リットーミュージック)

木曽福島町(現木曽町)出身の鈴木良雄さんの自伝。1946年生まれ、鈴木さんは幼少よりバイオリンやピアノに親しんで育ち、早稲田大学に進学してモダンジャズ研究会に所属。大学在学中にピアニストとしてプロ活動を開始し、後にベーシストへ転向。1973年に渡米し、スタン・ゲッツらのレギュラー・ベース奏者として活躍。1985年に帰国後もイーストバウンスなど自身のリーダー・バンドなどで精力的に活動。日本ジャズ界のリーダー的存在で、6月29日には木曽町誕生20周年記念事業の一環として、町文化交流センターでトークとジャズコンサートが開かれる。



編集後記

今年は木曽町が誕生して20年という大きな節目の年だ。この間、御嶽山の噴火という大きな火山災害をはじめさまざまな出来事があった。合併時に13,900人だった人口が現在は9,700人余り。死亡に対して出生が少ない自然減が顕著だ。人口減少に伴い医療や教育、産業など多方面で新たな課題も生じてきている。これから一層、行政や議会、住民が一体となった取り組みが重要になってきている。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 木曽郡木曽町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com



Facebook